



巻頭言 不断の議会改革を！

私が属する会派「無会派」は7月末で解散しました。解散の経緯は「ブログ 増田望三郎」で検索し、『8月7日付 会派「無会派」を解散した理由（わけ）』をお読みください。

●議会の不平等さが際立つ結果に

解散した結果、

①望三郎と小林純子議員は議会運営委員会（議運）に参加できなくなった。会派「無会派」に按分枠2名があったが、無所属議員は5人となり、3名以上何名居ても議運枠は1名のまま。今回は純子議員が議運に参加。

②望三郎は議会改革推進委員会（改革委）に参加できなくなった。

③同じく改革委メンバーだった橋本裕二議員、広報委員会委員長だった増井裕壽議員もそれぞれの委員会に参加できなくなった。

④望三郎、純子議員、橋本議員、増井議員はそれぞれの広域施設組合議会に参加できなくなった。

※「参加できなくなった」と書きましたが、手続き上は「辞職」という形になりました。

これら①～④は議会先例に基づくものですが、みなさん、お分かりでしょうか、この不平等さ。会派を解散し、無所属になった途端

に、このような扱いになってしまうのです。これは市民に選挙で選ばれた一人一人の議員は平等であるという議員平等の原則に反しています。会派を組むかどうかは個人の自由ですが、今の市議会では会派が優位状態にあり、無所属議員は不利益を受けるのです。

●次世代の議員たちのためにも必要な改革

①は会派の解散時に認識していましたが、実は②③④については、会派の解散時には知りませんでした。これまでも無所属議員は広報委、改革委、広域組合に参加していたのですが、それは先例に反したことだったのです。このように時々判断により無所属議員への対応が左右されていました。

今回、先例通りの対応を議会がしたこと、私たち無所属になった議員は、それまで各委員会で進めていた議会改革や議会広報の取り組みを結果として投げ出す形になりました。それを「無責任だ」と公式な委員会の場で発言する議員も居ました。また「同じ報酬にも関わらず、無所属議員は議会運営の役割を担わないのはおかしい。」という意見も。会派解散により議会運営が滞った面は否めませんが、そもそもこのような議会運営の仕組みにこそ根本的な原因があるのです。そのことが少し粗っぽい形でしたが、今回の我々の会派解散により露呈したのです。このドタバタな



みなさん、こんにちは。安曇野市議会議員の増田望三郎です。安曇野市政や議会が市民にとって身近になるために、虹（＝Rainbow レインボウ）の架け橋となるような議員活動をしていきます。望三郎の活動はブログやフェイスブック、インスタでもどうぞ。

状況により、これまでの先例を見直さざるを得ないでしょう。

私も議会改革の志半ばでの改革委員長降板は残念でした。それでも「肉を切らせて骨を断つ」で、次期に登場する若い議員たちのためにも、議会運営の抜本的改革に繋がることを願っての今回の我々の積極的な会派解散でした。

我われ安曇野市議会の最高法規である議会基本条例の前文に、「不断の議会改革を重ねながら市民の信託に全力で応えていくことを誓い…」とあります。議会の不断なる議会改革にぜひ市民のみなさん、注目してください。

チーム議会についての一考察

私はよく「チーム議会」という言葉を使います。議員個人の活動だけでなく、二元代表制の一翼を担う議会の持つ権能や役割を我われ議員が自覚し、一丸となって職責を果たそうという思いで使っています。

一方、私は議会での出来事をネットで逐一発信しています。7月に行った議会報告会についての発信も、私の感じたことを書きました。「ブログ 増田望三郎」で検索し、『7月24日付 議会報告会の報告。市民の洗礼』をお読みください。こういった発信が、議会の会議やその他の場で「望三郎はチーム議会と言いながら、議会批判をしている」と他の議員から非難されることがあります。

これについて私は2つのことを思います。まず個人の発言は個人で責任を負うと共に、発言はどこまでも自由であるべきです。何か反

●プロフィール

大分県出身 53 歳。東京経由で安曇野に移住し 19 年目に。三郷小倉に妻と子ども、妻の両親の3世代で暮らす。自給の農業をしながら、出会いと体験の宿『安曇野地球宿（ちきゅうやど）』を経営。安曇野市議3期目。好きな言葉は『出会い、共感、展開』



論があるなら、その人も持論を語ればいい。我われ議員は言葉の力で勝負するのだから。2つ目は「チーム議会」をはき違えないでほしいということ。議会は組織のための組織ではなく、市民のための組織です。市民益のために我われは「チーム議会」になるべきです。我々自身を守るためではない。自分の属する組織を批判できないようでは、その組織は停滞し、結果市民益から離れていきます。

以上、昨年秋の選挙からちょうど1年。4人で組んだ会派や議会改革委員長、議運など、3期目議員としてのスタートでしたが、1年経って今このような状況と私の考えであることを報告します。もうちょっと戦略的にうまくやってほしいと思う支持者の方たちも少なからずいると思います。しかし筋を通すことを貫いた結果であることをご理解いただきたいです。またここからやっていきますので、応援をお願いします。

議員活動報告会のお知らせ

有志の議員による合同の議員活動報告会を開催します。約3年ぶりの実会場での開催です。市民のみなさんとの意見交換も行いますので、ぜひご参加ください。

参加予定議員）小林純子、橋本裕二、増井裕壽、増田望三郎

日時：10月22日（土）

pm 2時～4時

場所：穂高会館



9月定例会の一般質問

テーマ「持続可能な農業へ転換～ 学校給食の有機米を端緒に～」

【解説】

農水省は2021年5月、農林水産業の生産力と持続可能性とを矛盾することなく高めていく「みどりの食料システム戦略」を策定しました。具体的には、2050年までに化学農薬の使用量を50%低減、輸入原料や化石燃料を原料とした化学肥料の使用量を30%低減、耕地面積に占める有機農業の取組面積の割合を現在の0.5%から25%に拡大する野心的な数値目標を設定しています。

化学農薬や化学肥料を多用する慣行農業をなぜ見直す必要があるのか。その理由は化学肥料の原料は原油、天然ガスなど化石燃料が使用され、脱炭素の流れに逆行すること、また原料のほぼ100%が中国やカナダなど海外輸入に依存すること、そこに今回のウクライナ情勢や中国の輸出規制を原因とした肥料高騰による生産コストの上昇が挙げられます。農業立市のまち安曇野の農業は持続可能なのか、化学肥料を多用する慣行農業が主流である本市の農業も持続可能な農業への移行を進めるのか質問しました。



▲肥料を使わない無施肥栽培を進める果樹農家

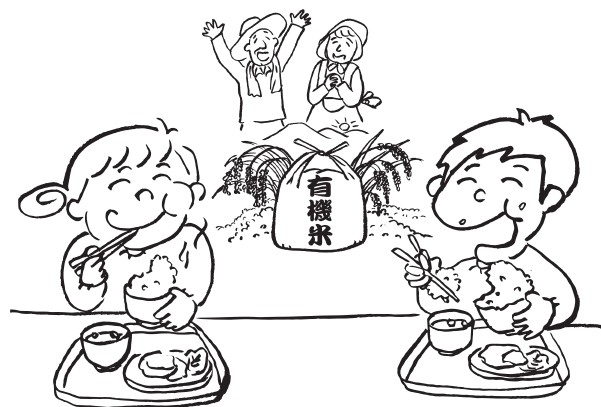
望市議 農水省は「みどりの食料システム戦略※（以下戦略）」を策定した。農業におけ

る持続可能性とは、脱炭素や海外依存からの脱却だけでなく、安曇野の生物環境、水環境についても考慮すべきだ。化学肥料を多用する市の慣行農業は持続可能か。市の地下水も一部、水質は危機的な状況にある。市も戦略に沿った方向、化学農薬や化学肥料の減、有機農業の拡大へ舵を切るのか。

市長 有機農業は非常に手間がかかり、今の高齢化した農業生産者にはなかなか難しいが、中長期的にはその選択しかあり得ない。
望市議 有機農業への移行を促す端緒として、学校給食に有機米の導入を提案する。既に年度に一回取り入れているがなぜか。

教育長 子供たち、保護者が環境負荷の少ない農業に関心を持つことは非常に大切。農家が日々努力と工夫を重ねている事実も知らせることは必要。その認識に立って提供した。
望市議 行政による公共調達で消費の部分を支える。この出口戦略があれば、安曇野の子供たちのためにより安全・安心なお米を生産し、かつ売価が通常の倍の値段となる有機米を作ろうという米農家さんは出てくる。給食の有機米を学期に1回、月1回と増やしていけないか。

教育長 年1回程度続けていければ。
市長 もうちょっと増やしてもいいかなというのが正直な感想。スモールスタートでじわじわ広がっていくというのが有機農法にふさわしいやり方。



国葬反対の意見書提出案は否決

私は国葬に反対の立場でした。概算で16億6千万円の費用が掛かる国葬を、国会の議決無しに強引に推し進めることは問題です。日本国憲法第83条には、「国の財政を処理する権限は、国会の議決に基いて、これを行行使しなければならない。」とあります。国家が支出や課税といった財政活動を行う場合には、国民の代表者で構成される国会での議決が必要であるとする「財政民主主義」です。これが一切無視され行われた今回の国葬は、同じ議会人として看過できませんでした。しかし結果は意見書は賛成少数で否決されました。

サポーターからの応援メッセージ㉓



若林謙一さん（穂高）

望三郎さんはユニークな地球宿の経営、市議会議員としての活躍等で昔より存じていました。初めて実際にお会いしたのは私が退職後、安曇野市に戻り家の周りの環境について相談させて頂いた時でした。

望三郎さんは相談当日その場で、関係する市担当者の方々、更には県の関係部署等に速やかに連絡、対応を含めて動いて頂きました。その的確な判断、スピードに驚きました。そしてこのように独りの市民に対しても適切に対応して頂ける議員さんがおられるここ安曇野市の将来の姿が胸に浮かび、安曇野市の私達住民は今までも増して満ち足りた安心感とワクワクする素晴らしい安曇野の未来を感じました。

日々変貌していくこの町で、これからも望三郎さんの活躍が安曇野市にとって更なる魅力的な街になり、発展していく。引き続きその原動力になることを切に希望しております。

